The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	幕末泉州における豪商の思想 : 里井浮丘関係文書拾遺
Author(s)	青木, 善子
Citation	待兼山論叢. 史学篇. 1977, 10, p. 57-77
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/47970
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

幕末泉州における豪商の思想

――里井浮丘関係文書拾遺――

青木善子

幕末における豪農商の行動と思想は、日本近代成立にあたって追究すべき課題となっている。本稿は、この研究の一素材として、幕末の動乱期を生きた泉州の一豪商里井浮丘に関する文書を紹介しようとするものである。さて浮丘は寛政十一（一七九九）年、泉州日根郡中庄村湊浦（現在泉佐野市）の里井家の一族治右衛門清順の四男として生まれた。長兄が病弱で他は早世したため、彼が家業の廻船問屋を嗣いだ。浮丘は号で、通称治右衛門、諱は孝幹、字を元礼といい、他に号は快園、半酣、跛鼈老人等がある。現在の泉佐野市域はほぼ岸和田藩領であるが、中庄村は慶長初年より小堀領、天明八（一七八八）年以降ほぼ天領で、文政十三（一八三〇）年からは岸和田藩の預り所であった。泉南地域は中世以来の土豪支配が残存しており、彼らは大庄屋七人衆などとして江戸前期、家来百姓を率いて絶大な権力を持っていた。中庄村においても同様で、小堀氏の代官庄屋として新川氏がいた。しかし湊浦は商業都市として発展してきた佐野の町続きに延宝、貞享前後に開発され、開発当初こそ土豪の力が大きかったが、やがてその支配力も衰え、町方が急速に発展して、元禄九（一六九六）年には家数一八一軒「船商売諸商人相揃金銀分限衆中、町人同前之儀ニ御座候」といわれる町場となった。佐野には廻船問屋として北国海運に従い、大名貸まで行った有名な食野、

唐金氏が出ているが、里井氏も廻船問屋であった。

この地域の上流階級の文化的教養は伝統的、古典的なもので、漢詩文、和歌、書画等が一般的であったようである。治右衛門家も代々好学で、祖父克孝は漢学を修め詩文をよくし、父もこれにならい、蔵書も豊富で浮丘は幼い頃から自然書物に親しんでいた。十三才の時兄孝胤と共に紀州の儒者内藤慎につき経史等の漢学を修め、書は京の松本研斎に学び絵も習った。これらの研鑽は生涯怠らず、書画の鑑識にも優れ、豊かな財力で中国の書画をはじめ優品を蔵した。其手蹟は世間に喧伝され、古今の画巻に賛や跋を四方から請われ、また遠近から書画の展観を請う者も少くなく家業に差支える程になったので「展観例并姓名」を定めてこれに応じ、時に盛宴を開いてその席に秘蔵の書画を展観した。その為文人墨客との交わりが深く、岡田半江、小田海仙、貫名海屋、日根対山、篠崎小竹、橋本桂園等が名を連ねている。さらに天保七（一八三六）年三十八才の冬、友人斎藤楽亭が国学者大国隆正を伴ってきた。天保飢饉の真只中で世情騒しき折、彼は急速に国学に傾き同年六月、正式に入門し、その後深い親交が結ばれた。ここにおいて彼の交際範囲はさらに広くなり国学者や勤王の志士達が彼を訪れるようになった。国学者鈴木重胤、勤王僧月性、天誅組の首領の一人藤本鉄石、その他梁川星巌、頼三樹三郎、広瀬旭荘、池内陶所等とも交渉があった。

さて浮丘は漢詩文・和歌・随筆・日記等多数の著作を遺している。「快園遺稿」には約五百編の漢詩文、「跛鼈集」には千七百首を超える和歌が収められ、四季、旅行遊覧、時事、題画類、賀、哀傷等、折に触れ感じた事を心のままに詠み、浮丘の血の通った人間像が浮き出されている。国文としては「古事記仁徳帝の御巻に見えたる**兎**寸川のかうがへ」「先師内藤先生と蓋丘子及び亡兄をまつるふみ并詩歌」等々、漢文としては「甘蔗論」「跋対山所画巻」「芳野山絶句序」等々で、ある程度まとまったものや、画巻の跋等がみられる。紀行文には「東征記」（江戸紀行――文

政四年）「南中跋渉」（龍神入湯の記――文政十三年）「いひ保無之梨」（吉野紀行――嘉永六年）「なごりの梅が香」（月瀬紀行――安政三年）がある。随筆「挾芳園随筆二」「快園随筆」には所感、書物の抜き書き、手紙の写し、聞き書き、備忘のメモ等が載せられている。日記には「日省簿」「行余楽記二」があり、前者は天保十五（一八四四）年九月十六日から慶応二（一八六六）年八月八日までの全十九冊で、天時、往来、著作、居処、飲食、出入、書信に欄を分かち毎日詳細に記録されている。後者は天保九（一八三八）年から同十三（一八四二）年までで、前者を簡略にしたものである。手写本としては「大日本史抄録」「中空ノ日記」「皇子系譜」「諸臣系譜」「通鑑綱目続編」「国意考」「山居新話」「辰軒二州百花軒集抄録」「知不足斎叢書目録」「源氏拾遺手満くら」「顧氏画譜序」「聊斎志異巻一」「万葉私抄」「董文敏公画禅室随筆」「大日本史賛数」「東坡策」「隔靴論」「三王外記」「碧血録」「八代集歌言葉」「海防策異聞誌」「八代和歌集題字部類」「資治通鑑綱目抄録」「藩翰譜抄録」「草書百韻歌」等々がある。このように史料は多数に上るのであるが、全面的に紹介する余裕もないので、次の目的のためその一部を紹介したい。

彼は家業は廻船問屋で、他に砂糖仲買人も兼ね土地も所有していたが、里正も務めた村役人である。幕末から維新の動乱期に、豪農商等の村役人達は一般農民と幕藩権力との接点に立つ故に危機意識を深め、政治的に目覚めて様々な活躍をした。また表面だって行動することがなくても何らかの対応を迫られるものである。彼らの行動を支えていた思想はどのようなものであり、日常的にいかなる意識形成が進められたのであろうか。幕藩制解体期においては特に地域により商品経済の発展・農民層分解の程度が異なり、低生産力のまま商品経済に巻き込まれ、貧窮分解する後進地域と、生産力が高く、商品経済の発展の先頭に立つ畿内先進地域とでは、自らの課題も異らざるを得なく、それ

に相応する意識形成が行われるであろう。豪農商層のみならず一般民衆の思想を考える場合、農民層分解により一般民衆の中に特有の階級や対立が生み出されつつあり、いかなる階級に立つかによりその意識も異なり、多様な思想が生じるであろう。この地域性・階級性を踏まえることで初めて、多様な民衆思想が明らかになり、民衆思想全体をとらえる事ができよう。[1]

この時期の畿内農民のイデオロギーを扱ったものとしては、夙にかれらの政治意識を考察した小林茂氏の論考がある。[2]その後、宮城公子氏が視点を小商品生産者のイデオロギー分析にかえ、国訴の思想を検討している。[3]また最近では民衆倫理を追究した布川清司氏の研究が公刊されている。[4]幕末期の民衆思想の多様な展開にふさわしく、研究状況も拡がりをみせているといえよう。そこで私は里井浮丘という一人の人物に視点をすえ幕藩体制の矛盾が顕在化し危機に瀕している上に、欧米諸国の圧力が加わる中で、彼は日常どのように意識形成を進めていったかを明らかにしたい。しかし本稿の目的に格好な彼のまとまった意見というものはほとんどないので、多数の史料の中から断片的に拾いあげたものを紹介しつつ、説明を加えてゆくことにする。

なお浮丘については地元泉佐野では幾つかの論稿があり、とくに泉佐野市教育委員会から『里井浮丘遺稿抄』（昭和四十一年）が発行され、『泉佐野市史』にも紹介されている。それゆえ『遺稿抄』に含まれているものは割愛し、他の文書を可能な限り紹介することにする。

一

幕藩体制も天保期になるとその矛盾は覆うすべもなく、天保元（一八三〇）年にはお陰参りが始まり、四年から八

年頃までは連年の凶作で全国的に飢饉が相続き、米価は高騰、多数の餓死者が続出する惨状を呈した。

浮丘は「挾芳園随筆」に米価と救貧対策の情況を記しているが、彼は領主の施米などを仁政と感謝し、自らも私財を投じている。この飢饉にあたっての浮丘の思想は、次の一文に明らかであろう。

丙吉カ牛喘ヲ問ヘルヲ以テ政ノ大体ヲ知レリトシ、国政ノ善悪ニテ陰陽調和シ、或ハ時気節ヲ失フトスルモノハ、天地ノ災変ヲ以テ人主ヲ警シムルノ方便ナルベク、理アルヒハ尽ク然ラザラン。何ヲ以テ謂フトナラハ、サシモ古ヘニ聖徳ノ聞ヘタカキ禹ハ十二年水ニ苦シミ、湯ニ七年ノ旱アリ。天災地変ハ聖賢ト云ヘ共避ヘカラザル事明ケシ。而レ共カク云事ハ天変不足畏ト云説ニ近クテ訓トスベカラズ。君タル人ハ畏レ慎ミ政ノ可否ヲ考ヘ自ラ省ルベキ事ニコソ、是ハ宦(ママ)ニアル人ノ論スベキ所ニシテ、イトモ賤シキ吾輩ノカケテモイフベキ事ニハアラズ。近キ頃ハ水旱交至リ米価ノ騰踊古今ニナキ所、最恐レツツシムベキ事ナリ。サレ共　上ノ御政イササカモ道ニ背カセ玉フ事無キヲミレバ所謂禹湯ノ水旱ニ類シテ、カカル昇平ノ大御代ニモ避ベカラサル天災ナルベシ。サテココニ自ラ省レバ、実コノ災変コソ吾輩ノ過ヲ天ヨリ戒シメ玉ヘルニハアリケン。慶元以降昇平日久シク人民王化ニ浴セルアマリ本ヲ措テ末ニ奔リ、奢侈ノ風日一日ヨリ甚ダシク、三都会ハサラ也。吾郷ノ如キ僻遠ノ田舎トイヘ共、美服ヲ纏ヒ膏粱ヲ食ヒ金銀珠玉ノ器ヲ玩ブ。天豈コレヲ容シタマハンヤ。今茲丁酉ノ夏六月ニ至テハ米一石ノ価三百匁、世々ノ載籍ニモ未タ見サル処、餓莩野ニ充チ、哭声巷ニ満ツ。ココニ至テ、事ノ心ヲ知ラスモノモ各自警戒ノ意ヲ発動シ、商賈ノ業ヲ捨テ農桑ヲ勤ムル事トナリヌ。天是ヲミソナハシテ忽チ憫惜ノ心ヲ起シ、風雨時ニ順ヒ、穀大ニ実リ、豊稔ノ相二三十年来アラザル所、歓ブヘク敬フベシ。冀ハ永ク心ニ存シテ節倹ヲ忘ルル事ナカラン事ヲ、昔紂ガ悪逆ニシテ奢侈ナリシモ、象牙ノ箸ニ凶国ノ兆ヲ看破セシ人アリ。紂ハ天下ノ主ナ

リケリ、今日ノ農家ノ児輩是ヲ何トカ思フ。能自ラ省テ紂王ノ奢侈ニクラベミヨ。（「挾芳園随筆二」）

我々が政治を論ずるのは言語道断だとして幕藩体制的身分秩序を支える立場に立ち、上には少しも不審を抱かず、農民達の奢侈を現在の嘆かわしい風潮と戒め、厳しく節約を説き、農本主義の立場から奢侈の風を改めるべく勧農抑商を主張している。

このことは安政元（一八五四）年に著した「甘蔗論」（『遺稿抄』所収）一編にも明らかである。彼は砂糖仲買を業ともしたから、泉州に拡がっていた甘蔗栽培の実態については熟知していた。そして、その家業にもかかわらず、甘蔗栽培の弊害八ヵ条をあげ、主穀農業を奨励したのである。商品経済の発達した泉州地方において、流通過程に従事しながら、浮丘がかく述べるのは、どのような理由からであろうか。

村落への商品経済の浸透は農民の生活や意識を変えていった。彼らはその中で上昇する可能性が与えられている一方、少しの油断でさらに没落する可能性もあり、生きる事は非常に緊張を孕んだものとなり、自ら商品生産の担い手としての意識に目覚めざるを得なく、今まで静かでのんびりした農村は緊迫したものとなった。名家のいくつかが衰退し始める様に、旧来の農業だけではやってゆけず、商品経済にうまく対応し得た者だけが新興勢力として抬頭が許された。格式や家柄という伝統的・世襲的価値はだんだん経済的実力に凌駕されてゆき、一般農民層は自己の生産力向上を試み、特権に対する批判意識が生まれ、村役人層の地位は動揺する。また商品生産の担い手として鍛えられていく中で、生産・流通の過程で対立を孕み利益を得る為、様々な才智を身に付けてゆき、金銭勘定にも敏感になる。農民達は生活習慣の異なる商人達と接する事で容易に騙されて没落する事もあり、それを防ぐため狡猾・瞞着等にならざるを得なくなる。さらに今までにない欲望を刺激され、伝統的なものとは異なる娯楽にも触れ、奢侈の風へと誘

発され、それが原因で没落する事もある。狡猾・奢侈は膨張し、連鎖的に大酒・賭博・喧嘩等の「心得違い」を起こす。質素・倹約を説き、このような風儀の乱れを取り締る触書が度々出されるし、彼の日記にも「界府吏来捕博徒」「博奕之徒自首于岸城」「博徒被杖」「集村人於教蓮寺諭諸賭之禁」「重令伍長以私通堕胎之禁」「無頼少年夜悪作」「向惣訴無頼少年」等の類の記事が嘉永以後増える。このように村落は絶えず上下分解の危機にみまわれながら変化していった。

「甘蔗論」では領主の苛酷な収奪や商業資本の圧迫等の支配機構が見抜けず、弊害三条から五条においては、肥料などの投下経費や収益を計算し、商品生産者的立場に立っているが、それを推し進めて新しい社会秩序を構成する方向はみられない。しかし、砂糖仲買人として村役人としてさすがに実情を具体的に的確に観察しているし、主観的には農民生活を守る事を第一として書かれていると思われる。狡猾・詐偽・私利の追求・貨幣のみを貴び穀物を賤しむ風潮を厳しく否定しているのは、彼の生活態度を表わしている。天保飢饉が体験となったのであろうが、米不足だから米を生産するという論理と、生産費の高騰やこのような風潮を生じさせる事から甘蔗栽培を否定し、主穀作物栽培を奨励したと思われる。

では浮丘は変動しつつある村落で、どのような態度で生きてゆこうとしたのだろうか。亡くなる一年前のものであるが、つぎにあげる。

奥里精老人が画ける寿星と布袋和尚との賛

親ありて世には生れ出、君ありてこそ身をもたつれ。人其本をわすれずしてよく親につかふるを孝といひ、よく君に事ふるを忠といふ。忠孝のためには身をつくしてつゆもおこたりたゆまぬをやがて大やまと心といひて、

天地の神もめでみそなはし、聖のをしへもいひもてゆけば、ことはりハたがはずなん。さるからにかかる人にはおのづからなるさちありて、命は老人のかしらより長く、衣食ハ布袋和尚のはらつづミうつばかりみちたりなん。ただわたくしのこころにひかるる慾をかたくたへしのびて堪忍袋身をはなたず、かならずそのひもなときゆるめそよゆめ。

慶応のはじめの年の秋の半、奥ぬしがその家のをとなにしめさるる心を主人にかはりて快園老人戯にしるす。

忠・孝・禁欲・忍耐の徳目を実践すれば、道に違わないで幸福が得られると説き、「家のをとな」と言っているように、家・家族を念頭においていると思われる。

また村落指導者としての浮丘は、その伯父に理想を見出しているが、弘化四年六月、伯父の墓誌銘に次のごとく記している。

君諱原徳、字志恭、姓里井、邑之故家。□歳甚好学、而不尚該博、不喜浮萃。務施之実用、年三十為村甲奉上以敬、御下以誠。免作農事、勧課紡織、褒勤懲惰、廉潔自任。於是民風一新、旧弊尽革矣。（後略）

墓誌という性質上誇張はあるが、彼はこの伯父を尊敬し、村役人の手本にしていたと思われる。彼自身は前述したように、天保の飢饉の時、貧民を賑恤したため岸和田藩主より礼服を賜わり「たらちねをおほふにさへぞたりぬべき身にあまりぬる賜ものの袖」と詠んでいる。同様なものを日記から拾ってみる。「弘化四・四・九、赴岸衙蒙特恩之命」「弘化四・九・廿二、官賜銀褒西城炎上之年献金之功」「嘉永四・二・廿三、赴岸衙辟命官許帯剱着袴」「嘉永四・十一・十八、太守賜膳褒去年米賑恤貧民也」「安政四・十二・三、赴岸城官賜盃」また弘化三（一八四六）年退職を願い岸和田藩に度々赴いていたが、村人は「弘化三・九・七、日根平松二氏夜聚村人于平源之家議余退職」「弘

化三・九・九、村人来請予在職」と記しているのをみると、村人にもよく尽していた様である。これらから里正として、彼の言葉を借りるなら「奉上以敬、御下以誠」という態度で接していったと思われる。

結局彼は天保期から幕末にかけ商品経済の浸透により、農民達が徐々にその論理を身につけてゆく中で、またそれに伴う様々な変化や危機に対して、その新しい社会に順応する方向でなく、むしろ一見、逆行する態度をとった。それは村落が絶えず上下分解の危機にみまわれ変化し、さらに諸々の欲望が刺激され奢侈の風が広がる中で、忠・孝・倹約・忍耐・正直等の徳目により主体性を確立する事で、道を踏み外さぬよう、没落を防ごうとしたと思われる。このような彼の意識や、相互扶助を説き、身分制的秩序に立つ事は幕府の民衆教化政策とも重なり、幕藩体制を下から支えるものであった。そこには浮丘自身の家存続に対する危機感も潜んでいたと思われる。

二

浮丘の思想・意識は、学問・教養にはぐくまれたことはいうまでもない。幼時より経史等の漢学を修めたが、やがて大国隆正を知るに及んで、これに師事した。このような学問・教養さらに趣味生活を含めて、浮丘の文化的環境は畿内豪商の一つの典型とみることができよう。

いま日記や随筆にみられる書物の一部をあげておこう。それは論語・孟子・大学・中庸・荘子・礼記・政記・唐書・資治通鑑・史記・水滸伝・左氏伝・三国志・五代史・聊斎志異・知不足斎叢書・公羊伝・七仏聖教・蘇武伝・坤輿図識・古事記伝・日本書紀・古訓・国意考・源氏物語・狭衣物語・大和物語・玉小櫛・万葉集・湖月抄・古今集・後撰集・拾遺集・後拾遺集・金葉集・詞花集・千載集・新古今集・大日本史・日本外史・国史略・大東世語・翁草・白

揚集・梧窓詩話・隔靴論・闢邪小言・拙堂文話・岐蘇路名勝図・和州巡覧記・養生録・醒世恒言・妖魅考・妙々奇談・兼好伝・和泉名勝図・采覧異言・菅笠日記・駿台雑話・花鏡・太平記・吾妻調・柿園詠草・嘉永廿五家集・読史管見・江戸繁昌記・社倉私議・台湾外記・海国図志、その他天下有山堂画芸・江邨銷夏録等書画に関するもので、嘉永二（一八四九）年以後、阿片始末・海防策・新論・外夷伝聞書・外泊記事・海外異伝・夷船雑記・東洋雑聞・海国兵談・海外新語・海防彙議・攘夷論等々を借りて写している。これは全く多様な系統のものを含んでいるが、当時の文化人の教養を示している。また彼は物学ばぬ者を批判し、学問を尊んでいたので、妹や子供にも早くから左伝・史記・論語・孟子・詩経等を学ばせ、女児のため古今集序・徒然草・和歌等を手本に書いてやり、安政五（一八五八）年から近隣の者と日本外史の会読を始めている。

このような学問のなかで、浮丘の後半生に大きな影響をもったのは、大国隆正に師事し国学を学んだことであった。隆正の思想はその一部にやまと心を「わが君のために身をばおもはじ」とするような封建的忠誠に徹しているものでなければならないとし、封建制を肯定して幕藩体制下に職域奉公論を説き、上に善政や仁政を期待し、家業に務め忠・孝・貞を尽すべきだとし、神武復古を幕藩体制創業への道と説くものであった。[5] 村落の変化・危機に対する彼の意識は、漢学や隆正からも学びとられ、学問的にそれらに裏づけられていったのであろう。彼と隆正との関係はかなり親密で、隆正から浮丘宛の手紙によると、彼は隆正に和歌を中心に著作した国文の類の添削、時に必要な詠草を依頼している。隆正も彼を信頼して、自分の勉学の様子を語り、隆正の著述した書物の販売、研究上必要な書物や著述材料の提供、著述出版費の工面を頼み、家庭の事情までも打ち明けている。隆正が大坂に来た時は、必ず彼の家を訪れ宿泊し、彼も隆正が在京の折には訪問し、普通の師弟関係以上の付き合いであった。

浮丘が国学に入った頃の感想は、彼の歌集「跛鼈集」序に記されている。「たとひ漢籍よくよみとき、からうたよく物すとも、わが国のことしらざらんはむげにいやしきわざになん。おのれ今まで外のみをつとめて内をしらざりしぞひがこころなる」。このちの浮丘は国学の道にいそしんでいるが、当時の意識は「快園私抄を著したることのやう」「中林竹洞の著書を評す」などの文章や和歌に知ることができる。これらは『遺稿抄』に復刻されているので省略し、和歌二首をあげておこう。

鈴屋翁

敷島の道わけまとふもろ人のたれかは君のあとによらざる

契中阿闍梨（ママ）の百五十回忌（嘉永三年）

栞せし君なかりせばいにしえにかへらましやは敷しまの道

巧みな歌ではないが、浮丘が国学の先達への傾倒を示していよう。

ところで浮丘は漢学・国学を学んでも、いわゆる道学者的なことにはならなかった。この地域の教養人にふさわしく、多彩な趣味生活を送っていた。佐野和歌社の選者として指導をおこなったし、詩文・書画を好んで多くの作品を残している。なかでも書画を非常に好み、優品を蒐集していたが、研究心も旺盛で、文人墨客の他に近在の者とも書画を見せあったり、貸借したりしている。彼は南宗画の大家となった同郷の日根対山の画才を認め、対山のため所蔵の名画を並べて臨模させ、さらに岡田半江・貫名海屋に教えを受けさせ、物質的援助もしていたようである。[6] その他囲碁・茶も好み、別邸挾芳園で茶会を開いている。旅行も好きで遠方へ旅した時は紀行文を作り、近くの犬鳴山・牛瀧山にも遊んでいる。大坂・京へ行った時はついでに知友の文人墨客を訪ね、書画を観賞、戯場を訪れている。近村

では佐野を中心に「角觝」「戯場」「演義」が開かれ、貝塚では「角觝」「散楽」「能」等が行われた。時代が下るにつれて、「木偶戯」「浄瑠璃」「滑稽話」「傀儡」「雑劇」「芝居」と種類が増え、村人達の楽しみになっていたようである。知人、親類の家でも「謡曲会」「演曲会」「浄瑠璃」「演義」「狂言」等が行われ、彼の家へも「佐野社中」が来て「浄瑠璃」を演じている。

このような多方面の教養と趣味は程度の差こそあれ、この地域の上層民達のそれを示していると思われ、一種のサロンの形成が窺える。天保期になると商品経済の展開により、各地で農村・地主手作経営の危機から国学と結びつく村役人達が多い。最近の風俗の華美を嘆き、農本主義を唱える点は彼と同じであるが、学問をやめ農事に専念せざるを得なくなったり、生産性向上・農民教化に努め、中には書道・茶道・生花・浄瑠璃・三絃などの余芸を排し、詩文章に耽るのを批判したりする者まで出現する。(7) 彼らと比較する時、浮丘の態度には著しい差がみられる。それはこの地方の伝統、彼の性質、家業が主に廻船問屋であることにもよるが、何といってもブルジョア的発展の先端に立つ畿内の生産力の高さ、文化の高さに依ると思われる。

三

前述したように、国学に心を寄せて以来、国学者や勤王の志士達が彼を訪れるようになった。その交友も書画を通してであろうが、彼らは展観を請い、酒を交えて国家について談じたのであろう。欧米列強が我国の近海に出没し、世情騒しくなるにつれ、浮丘は尊王攘夷思想を抱くことにより、国家的視野を獲得し、政治的に目覚めていった。しかし国学を学び始めたのが三十八才で、一家の主人として落着いた時期であったこともあり、交友のあった近隣熊取

中瑞雲斎のように表面だって活躍する事はなかった。次に彼の心事を伝える史料を紹介しよう。

世間では外国船来航が喧しく伝えられる中で、嘉永七（一八五四）年九月九日、ロシア船が紀州沖に現われ、十七日に大阪湾に進入してきた。この時摂泉海岸の騒ぎは一通りでなく、沿岸防備に各藩の武士が出動した。[8]「日省簿」にも「九・十六、異国船来紀州加太浦田倉崎」「九・十七、異国船入泉州海岸藩兵備厳密」「九・十八、異国船泊浪華」と記されている。彼はこのような西洋諸国の動きをいかに感じたであろうか。

和新川拾翠韻

海為坦路艦為城　顧盻投間転陣営
知否頃年封建固　四疆無処不藩屏
朝至西陲暮偪東　颶来雷去跡難窮
洋夷応是多虚喝　勿用騒然陥術中
明哲貽謀闕事稀　従来海禁可相依
托言通市非饑附　禍害豈唯飽而飛
廟廊林列折衝臣　悉是千磨百錬身
遇此盤根兼錯節　不知利器属何人
休言将士慣昇平　戎馬依然未解纓
覇府三千虎賁在　醜夷莫浪作驢鳴
廟謨未必出和親　百万貔貅守海浜

天下蒼生休過慮　筑波山畔能臣□
来時十万去三人　怒浪駭風佑武臣
千載神威猶一日　短兵急接勿顧身
夷狄従来虎狼心　好言甜語皆妄談
英雄巨眼如明鏡　長絶外交能迄今
世人視穀不知金　天下滔々商賈心
外侮想応田是致　掉将蟾斧擬来侵
多虞今日見醜夷　豪傑及時宜有為
中土少人論戦守　杞憂或独辺陲□
仁義道徳立予防　況復細戈護四疆
神造寰已長不抜　拝天拝地拝先生
雞林一旦巨挙揮　叱吒如雷震外幾
禦侮于今三百歳　豊王偉烈饒余輝
方面各流一帯川　望誉藉々圧群賢
胸中勝算知多少　立馬轅門瞻海天
曾聞南海有空嶼　其土可耕水可漁
応是神州区内地　休教醜虜作巣居

一家飽煖頼良田　瑞穂国恩高似天
唯祝妖氛早斂跡　昇平依旧万期年
皇天震怒豈無期　異類何来招禍基
後史応書嘉永事　神風照倒殄洋夷

嘉永七年九月十七日鄂羅船一隻倏忽入茅海泊天保山前数十日慨然而作

怪見俄羅期国船　中原底事嗅腥羶
仁風未破洋夷夢　鼾睡姑容卧榻辺

次某生韻

形勢古今唯不同　依然万世一王風
民心向背何頃卜　唯在戦和二策中

黠奴説

一黠奴数打抽豊、主人甚厭焉。歳云暮又来請貸金、主人辞焉。苦請、固辞。奴泣曰、奴窘迫殆乎、燃眉主如不肯救済、則当縊而死耳、然則主之前功亦皆廃也。主人哂曰、歳晩多事不遑為汝謀如今之急、汝且宜縊而止、余□当徐思之也。奴謀不行蓬累而去。衆為之輾然、当今亜夷之要我也。亦類之而強弱辞色特耳不過、老蘇所謂以声与

形也。我宜能勿与之抗使、海外諸国為之輾然而可也。

彼は実践活動を行わなかったが、「況や今の大御代のみさかりに小醜等が何事をかなすべきなれど、杞人の憂とかいふおのれが癡をいかがはせん」[9]と言っている。

さらに開港・通商をめぐって諸勢力が対立し、ついに安政五（一八五八）年にはアメリカを初め各国と修好通商条約が結ばれ、翌六年には神奈川等で貿易が開始された。貿易開始による国内物資の不足は物価騰貴を招き、人々の生活を圧迫した。それとともに井伊大老による安政の大獄が始まり、彼と交際のあった志士も逮捕され、翌六年にかけて処刑された。僧月性・梁川星巌死に、頼三樹三郎は刑死した。しかし通商条約締結後、各地で昂揚する尊王攘夷運動は文久三（一八六三）年、京を中心にピークに達した。しかし八月十八日の政変後挫折し、禁門の変、連合艦隊の下関砲撃で大打撃を受け崩壊する中で、政治勢力として討幕派が成長してきた。このように世情めまぐるしく変化し不安が続く状況の下で、国事に関する記事が盛んに伝えられ、彼はそれを丹念に写し取っている。江戸の取引先や京の知友から伝えられた様で、それらの記事が手に入ると近隣の者同志が廻しあって写している。今彼が写し取っている記事を少しあげてみると、公使駐在や自由交易、その他日本の重大事件についてのハリスとの対話「亜墨利加使節申出候一件、十月廿六日備中守宅ニ於て亜墨利加使節申立候趣。十一月六日於蕃書調所土岐丹波守・川路左衛門尉・鵜殿民部少輔・井上信濃守・永井玄蕃頭・亜墨利加使節之対話の趣」、桜田門外の変の経緯を述べた「春三月盗刺赤魂于江城桜門外」、生麦事件関係の物が数種、尊攘急進派が足利三代の像を梟するについてその罪状を示した「逆賊足利十五代」、筑波山挙兵に関する記事、長州藩の京都進軍に関する三条実美、毛利慶親（敬親）父子の免罪、入京を請う浜忠太郎・入江九一・松野三平等の願書、四国艦隊の下関攻撃の様子の記事、第二次長州征伐に関する建白書、

中外新報第十二号等である。尊攘派関係のものが多いが、彼はこのように様々な記事を伝えられ「国事素知非我分杞憂欝結奈如雲　幾回起摘芭蕉葉　就写長沙汰息文」と賦し、国の将来を憂いて、いてもたってもいられなかったようである。

それでは尊王攘夷思想を抱いていた彼はまたこのような状況をいかに考えていただろうか。それを示す史料をあげよう。

まず一連の志士達の行動については、桜田門外の変において「…十七人為天…除害」(10)と述べ、尊攘派が等持院足利三世の像を梟したのに対して、

都にありけるはなしをききて　有人梟足利三世塑像之首于三條磧（文久三年）

五百とせのむかしのうらみくりかへしいみしきわざをしづのをだまき

と詠んでいる。攘夷決定から天誅組の乱について、

恭聞親征之庙謨
嚮背何論西与東　鸞輿到処草偃風
醜夷知否幾千礮　不敵豊隆一撃功
和州党
狂耶侠耶義耶偽　蹟似叛臣非叛臣
巷説街談尤可怪　衆人猶庇此頑民

と賦し、禁門の変では、

是ハ元治元年六月ノ事也。七月十八日ニ至リテ京師大擾乱、長藩ノ士ト二千人程アリ会津始京都守衛ノ士ト大戦、洛中数十万ノ人家二十一日マデノ間ニ尽ク焦土トナル。嗚呼悲夫。

と言っている。また交友のあった頼三樹三郎・藤本鉄石の訃報を聞くとともに、弔いの詩を賦して彼らの人柄に敬意を表していた(『遺稿抄』所収)。この内容によれば禁門の変の記述が示すように尊王攘夷運動に戸惑いながらも、好意を持っていた事は明らかである。

次に貿易開始に伴う変化、それ以後の社会状況に対して

無題

黠夷貪餐食牟々　穢気腥風何日休
履薄臨深人不見　如今轂觫不唯牛
耳聞目見意茫然　時勢可驚又可憐
前月夷船来泊後　一担莱菔直千銭
胡塵沸処酔昏々　勧伯未堪当此煩
意気揚々尤一事　苦擐夷服学猢猻
世間早晩慣腥羶　固有民心日々遷
亜墨泥銀徒富国　中原粟帛貴斉天
忠義俠骨今何在　慷慨死灰幾不燃
慚愧祭余一芻狗　是非圏外負暄眠

云怯夷人　武人往々畏戦動輙日時勢也天命也。蓋此語元出雪消侯之意云。

莫抛人事委之天　天意常随人事施
至孝敲氷魚惣躍　孤忠囓雪雁遙伝
幽明一致応如響　上下同志理亦然
鼓舞投機敵王愾　貔貅百万可争先

洋夷のことをいひおこせつる文を見て（安政五年）

世の人のあかきこころの薄氷ふみとるたびにおどろかれつつ

夢の中にききつるうた（文久三年）

横はまの市にえみしをつどはせてあづまをのこは□をうるてふ

□は何といふ詞なりけんわすれたり

大直日の神にいのりたてまつる（慶応元年）

この神のみたまのふゆにえみしらが今のけがれをとくなほしてよ

胡服をきていかめしかるをききて（慶応元年）

ましらこそ人まねすといへ人にしてましらをまねぶ浅ましのよや

と慷慨し、激しい攘夷思想を説いているのである。

彼の尊王攘夷論は、日本は万世一系の皇国であり万国に卓絶するとした、観念的で客観的認識を全く欠如したものであった。ただ国家・天皇への忠誠・忠義の心情に共鳴したが、その域をでず、何らの具体的方策を示すことなく、政治論も著わしていない。それは彼が政治的実践活動を行わなかった事と対応している。したがってこの意識は幕藩体制的秩序と矛盾するものと考えられていない。もちろん新しい社会への構想をもつものでもなかった。強いていうなら漠然とした天皇中心の社会を予想していたのであろうか。村落支配者としての浮丘は、こうした問題を意図的に避けたことも事実であった。また彼と志士達との結びつきは、書画観賞という風雅の交わりとしておこなわれたが、それが志士の運動の一つの方法と推測されるとともに、浮丘にとっても一種の緩衝帯となったのであろう。

浮丘は、安政四（一八五七）年、五十九才で家督を子息孝準に譲り、万延元（一八六〇）年村役も辞した。そして慶応二（一八六六）年没した。

注

（1）周知の如く近代化過程の民衆思想については、安丸良夫氏の著名な研究がある。氏の研究は、民衆思想を通俗道徳で一括してとらえているのが特色である。それに対し、この地域性・階級性を指摘したものに、宮城公子氏「変革期の思想」（『日本史研究』一一一号）がある。

（2）小林茂氏「封建制崩壊期における畿内農民のイデオロギーの展開――農民文化の一視点――」（『ヒストリア』一四号）。

同氏「畿内農民の政治意識の成長――勢田川浚を中心として――」（『下関商経論集』五巻三号）。

（3）宮城氏前掲論文。同氏「変革期の思想」（『講座日本史』四、東大出版会）。

（4）布川清司氏『近世日本の民衆倫理思想』（弘文堂）。

（5）大国隆正については、芳賀登氏『幕末国学の展開』。

（6）彼と対山との関係については、『泉佐野市史』、『里井浮丘遺稿抄』。

（7）天保期国学者については、芳賀氏前掲書。

（8）『泉佐野市史』。

（9）「中林竹洞の著書を評す」。

（10）「春三月盗刺赤魂于江城桜門外」において、水戸薩摩浪士による井伊直弼殺害についての意見として述べられている。

（後記）　本稿は里井禎次郎氏（現河内長野市）所蔵文書によった。調査には当時本学学生であった里井純氏のお世話になった。また縁戚に当られる泉佐野市山本昇平氏からも教示を得た。なお、原稿はもともと八〇枚のものであったが、史料紹介を中心に縮削した。削減その他脇田修先生の指導を得た。付記して感謝の意を表する。